



連載：研究者になる！－第47回－

「違い」を強みにする

法学研究科・准教授
辻 由希



研究者への道を進もうと決心したのはやや遅く、その分まわり道をしてきました。私の専門は「ジェンダーと政治」という政治学のなかでは比較的新しい分野です。法学部の学部生時代には社会学のジェンダー／フェミニズム論を個人的関心から読んでいましたが、それと政治学とは「別もの」だ感じていました。所属したゼミでは、東京で国会議員にインタビュー調査するという経験をしました。ちょうど新進党が解党して新・民主党が誕生し、野党として存在感を示し始めるという「第二の政界再編期」にあっていました。日本政治が構造的・制度的に大きく変化する1990年代に政治に触れたことが、政治学への運命の興味を掻き立てるきっかけとなりました。

ただ、学問に漠然とした憧れを感じてはいたものの、学部卒業時には、普通に就職活動をして民間企業に採用されました。自分で給料を稼いで早く自立したいという思いが強かったこと、身近に大学院に進んだ人がいなかったために研究者として生きていくキャリアのイメージが描き難かったのが理由です。加えて基本的におっちょこちょいの性格なので、調べつくし、考えつくしてから進路を選んだというよりも、「迷ったら飛び込んでみよう」という信条でかなり行き当たりばったりに就職しました。

結局、就職して数年のうちに学問への想いが強くなってしまい、今度は研究者になろうという覚悟をもって大学院に戻りました。採用してくれた企業には迷惑をかけましたが、社会人としてのマナーや成果へのこだわりといった心構えを学べたことはその後役に立っています。また、会社員時代に様々な女性の働き方に触れ、ジェンダー論への関心も再燃しました。ちょうどその時期に行われた政策や制度の改正に女性の就労継続に対する政界・官界や経済界の考え方の変化を感じたこと、しかし他方で職場では結婚・出産を機に退職する女性社員が多いという実態を身近でみたことで、大学院に進んで研究したいテーマを見つけることができました。具体的には、ジェンダーに関わる政策・制度の変化（あるいは変化の

遅さ）や、その背後にある政治の構造や動態について研究したいと思いました。

大学院に入ってからは、政治学という分野において、自分の選んだ研究テーマの意義をどう正当化するか、ということに苦心しました。人文・社会科学領域の他の研究分野に比べ、政治学ではジェンダー論の浸透が遅れていました。学会や研究会で出会った研究者の方々に「私の専門は<ジェンダーと政治>です」といっても、なかなか通じないことが多かったです。また、「女性研究者だからジェンダーを専門にする」、「ジェンダーは政治学の主流でなく周辺領域」という風に見られがちな点（これは今でもあるかもしれませんが）をどう克服していくか、という点も課題です。これらについて自分なりに説明できるようになったのは、博士後期課程の途中でカナダのヨーク大学の大学院に2年間留学し、「ジェンダーと政治」について体系的に学んだことが大きかったです。

また、幸か不幸か、日本社会の構造変化によって高齢化・少子化や非婚化といった現象がクローズアップされることが増え、高度成長期～1980年代までに形成された日本の政策や制度（雇用、社会保障、家族に関する諸制度）が人びとの生活に合わなくなっている、という状況への認識が広まったことで、研究テーマを説明しやすくなりました。博士号を取得後はありがたいことに順調に職に就くことができましたが、それには時代のタイミングが合ったという運の要素が大きいと思っています。

研究を進める上で意識しているのは、領域間ギャップを強みにする、ということです。私の研究テーマは学際性の高いものであるため、社会学や人文科学など政治学以外の他分野の研究もフォローしていかなければなりません。その結果、政治学のほうでも社会学のほうでもややマイナーな立場に立っていることが多いですが、そのような視点からこそ見えるもの・言えることは何かということを意識して探しています。また、日本政治を欧米やアジアなど他の諸国との比較の枠組みに載せて分析していく必要がありますが、そのときにも同じように、それぞれの国・社会で「当たり前」とされていることをひっくり返すようにしたいと思っています。そのような視点をもつ上で、まわり道をしたように、人とは違うテーマを選んできたことは役立っているかもしれないと感じています。



たろばな 京都大学男女共同参画推進センター Gender Equality Promotion Center

男女共同参画の推進にあたって

京都大学総長 松本 紘



本学では、平成18年に男女共同参画基本理念と基本方針を定め、平成21年に「京都大学男女共同参画推進アクション・プラン」を策定し、平成25年までの5年間で男女共同参画を強力に推し進めてまいりました。

さらに、平成25年には単独の副学長（男女共同参画）を設置して推進体制を強化し、5年間の総括を行うとともに、今後の更なる推進に向けた方針の策定に着手しております。

平成26年度については、以下に示す3つの事項を柱として、重点的に男女共同参画推進に取り組みます。

京都大学では今後も男性、女性及び教員、職員が隔てなく存分に能力を発揮できる制度や環境の整備に努めてまいります。

■平成26年度 京都大学男女共同参画推進重点プラン

①家庭生活との両立支援

現在行っている育児支援事業、介護支援事業を継続しつつ、育児支援、介護支援に関する情報収集を強化、情報提供を充実させることにより家庭生活との両立支援を図る。

- ・育児支援、介護支援に関する情報収集を強化するとともに、情報の一元化を行う。
- ・病児保育サービスを行っている病院のリストの作成、掲載等。
- ・新しい建物の完成後の待機乳児について、予算の状況を考慮しつつ、受け入れ人数を再検討すると共に、対象の拡大について検討を行う。

②次世代育成支援

高・大連携、地域連携及び女子学生、研究者のキャリアパス支援を拡充することにより次世代育成支援を図る。

- ・車座フォーラムの拡充。本学女子学生を中心とした女子高校生との座談会の開催。
- ・ジュニアキャンパスやオープンキャンパス等の機会における、女子生徒を対象とした京都大学をアピールする催しの検討。

③男女共同参画推進体制の整備

平成26年4月に行われる男女共同参画推進体制の整備を踏まえ、従前から行っている事業について、新体制での確実な継承を行うと共に、拡充が必要とされる項目について、検討を行う。

男女共同参画推進本部の設置について

京都大学副学長（男女共同参画担当）稲葉 カヨ



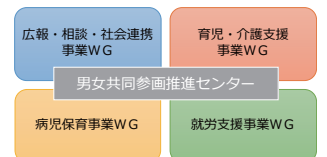
5年間の「京都大学男女共同参画推進アクション・プラン」を総括し、これまで組織上分離していた男女共同参画推進室と女性研究者支援センターをより有機的に運営しなければならないことが分かりました。

そのため、平成26年度からは推進体制を強化し、男女共同参画推進本部を設置することになりました。

この改組により、学内構成員の修学・就労支援を一層の充実を計りつつ推進していく所存です。皆様のご理解、ご協力、ご支援をお願い申し上げます。

男女共同参画推進センター

京都大学男女共同参画推進本部の事業実施部門である男女共同参画推進委員会のもとに、男女共同参画推進センターが設置されました。これは、広報・相談・社会連携事業ワーキンググループ、育児・介護支援ワーキンググループ、病児保育事業ワーキンググループ、就労支援事業ワーキンググループの4つのワーキンググループから構成されています。



Gender Equality Promotion Center

〒606-8303 京都市左京区吉田橘町
電話 075 (753) 2437
FAX 075 (753) 2436
E-mail w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>

京都大学たちばな賞（優秀女性研究者賞）表彰式と研究発表



吉川潔理事、奥村優子氏、酒井章子氏、稲葉力日副学長、片山裕美子氏、王柳蘭氏、安原弘展社長

優れた研究成果を挙げた本学の若手女性研究者を顕彰する制度である、京都大学たちばな賞（優秀女性研究者賞）の第6回の表彰式が、3月3日（月）、京都大学医学部芝蘭会館 稲盛ホールにて開催されました。

最初に、選考委員長である吉川 潔理事・副学長（研究担当）より、選考経緯に関する報告を交えた開会の挨拶がありました。

今年度より、これまでの他薦から、通常の公募にしたこと、出産・育児など女性特有のライフイベントを考慮して、応募資格の年齢上限を40歳から42歳に変更したことにより、大幅な応募者増加となったことが報告されました。応募者は、学生部門12名、研究者部門17名で、11名の選考委員による書類審査を経て、3名の学生、5名の研究者にインタビューを交えた二次選考を行い、たちばな賞受賞者と、今年度より新たに設置された優秀女性研究者奨励賞の受賞者が、決まりました。4名の受賞者には、祝辞として、今後の活躍を期待するとのメッセージが贈られました。

次に表彰式を行いました。はじめに、たちばな賞学生部門受賞者の片山裕美子 人間・環境学研究所博士課程3年、研究者部門受賞者の王柳蘭 白眉センター特定准教授に、松本紘 総長より、それぞれ表彰状と記念楯が授与されました。続いて、副賞の「ワコール賞」が、安原弘展 ワコール代表取締役社長から贈呈されました。

また、優秀女性研究者奨励賞学生部門受賞者の奥村優子 文学研究科博士課程3年、研究者部門受賞者の酒井章子 生態学研究センター准教授にも、同じく松本総長より表彰状が、また安原社長より副賞が贈呈されました。

その後、松本総長から、祝辞がありました。最初に、たちばな賞の由来に触れ、女性研究者の永続的な発展を願って、文化勲章にも使用されている常緑樹「橘」を採用したこと、女子の健やかな成長を願う「3月3日・ひなまつり」の日を表彰式の日としたことが、話されました。

たちばな賞は、研究分野を問わない女性限定の表彰であることが特長で、応募者のレベルも高く、審査員は受賞者選考で、非常に悩んだことにも触られました。

京都大学では、研究者に占める女性の比率が約1割と少ないのですが、学生では女子の比率が4分の1であることから、もっとたくさん優秀な女性研究者が育ってくれることを期待していると話されました。その意味で、受賞された4名には、研究面はもちろんのこと、多岐にわたる異分野研究者との交流を深め、女性研究者リーダーとして進んで欲しいと述べられました。

京都大学では、若手支援として、研究者・学生・職員の海外派遣事業「ジョンワプログラム」や、若手研究者の国際公募「白眉プロジェクト」を実行していること

2014年3月3日（月）芝蘭会館 稲盛ホールにて

紹介もあり、若手人材への投資が、本学の、ひいては日本の発展に必要不可欠であると話されました。

最後にたちばな賞にご協力いただいたワコール社への謝辞と、選考委員、スタッフへのねぎらいを添えて、4名の受賞者に、今後の活躍への期待が述べられました。

続いて、安原社長から、祝辞をいただきました。

昨年4月に政府が、女性の力を最大限発揮させることを成長戦略の中核と位置づけ、企業の女性管理職の割合を引き上げることが目指されている中、ワコール社でも、4月より課長以上の管理職に占める女性割合は、1割を超えるそうです。ワコール社と本学との共同研究では、スポーツコンディショニングウェア（CW-X）の開発がありますが、今後は、高齢者へのヘルスケアに関する研究についても実施検討に入ったそうです。

安原社長よりは、女性の活躍への期待をこめて、4名の受賞者への祝辞が贈られました。

引き続き、たちばな賞受賞者による研究発表が行われました。



学生部門受賞者の片山氏からは、「グリーンフォトニクスを実現する希土類イオン添加波長変換材料の設計と発光機構解明」のテーマで発表がありました。

はじめに、テーマの「グリーン」を「持続可能性」、「フォトニクス」を「光に関連する技術システム」とそれぞれ読み替え、グリーンフォトニクスとは、環境、経済、社会に持続可能性を与える光に関連する技術システムであると説明がありました。これには、主に3種類のものがあり、①太陽光発電に代表されるエネルギー生成、②LED照明などの省エネルギー材料、③材料を生成する技術、に分類されます。片山氏は、太陽光を有効利用する、希土類イオンを用いた波長変換（発光）材料の開発を行っています。

希土類イオンは、私たちの生活で身近なものにも使われています。白色LED、蛍光灯、光ファイバー増幅器、非常口などでみられる長い残光を示す表示灯などです。

片山氏は、太陽電池の効率を上げるために、太陽光の利用効率を増加させる、2種の希土類イオンを使った波長変換材料を研究し、微細なフッ化物結晶が析出した透明結晶化ガラスの作製に成功し、希土類イオンの効率的な波長変換を達成しました。さらに、2,000℃という高温の太陽炉を作製し、電気エネルギーを用いずに長い残光を示す蛍光体の開発に成功しました。

研究面での活躍が著しい片山氏ですが、国際会議の

翌々日に第一子を出産されたエピソードの紹介や、3月3日が自身の誕生日であることに触れ、最高のプレゼントをもらったと、所属研究室への謝辞を述べられました。



次に、研究者部門受賞者の王氏より「アジアにおける中国系ディアスポラと多角的共生空間の生成」の発表がありました。

王氏は、神戸生まれの華僑3世で、中国、台湾、日本の異文化が混ざり合った環境で育ち、常に自分の多文化性を意識してきたそうです。

研究テーマは、「ふるさとから切り離された人びと（移民・難民）にとってのコミュニティの再生とは？」で、宗教、言語、文化などソフト面の役割を解明することです。研究手法は、タイ北部/ミャンマー国境地帯でのフィールド研究で、そのはじまりは、タイでの、中国人イスラム教徒との出会いでした。同じ中国人でも宗教が異なると、生き方が全く違うことに驚嘆したそうです。

国境地帯に住む移民・難民の間では、宗教・食・言語が脈々と受け継がれ、その環境に、したたかに適応しつつ、国境を越えて、財の流通を通じた宗教ネットワークで故郷と繋がっているのです。中国の文化大革命後は、祖国での文化が停滞する中、移民が祖国の文化継承に一躍を担ってきました。王氏は、移民の持つ共生の力は、多様性を生かしたグローバルな成熟社会の実現に繋がると考えられています。

恩師は、「フィールドから学べ。フィールドが先生である。」と常におっしゃったそうです。王氏もまた、研究対象である彼ら（移民）から、人生の先輩として多くを学んだと話されました。

また、王氏は、3人の子どもをもつ母になったことで、研究と育児との両立において困難な局面にも向き合いましたが、恩師、家族や友人、さらに京大内外の女性研究者支援制度に支えられて研究を続けることができました。そのような環境と制度の恩恵を受けたことで、王氏は女性研究者や子どもの成長を含めた次世代にむけた環境整備の重要性を意識するようになったそうです。2012年には、稲葉力日副学長（男女共同参画担当）より、閉会の挨拶がありました。4人には、この受賞を機に、女性研究者のロールモデルとなるよう、より一層の活躍を期待していると話されました。また、京都大学が、男女ともに、もっと能力を発揮できるよう、環境整備を行なっていく方針を示し、会場の参加者に、支援・協力の呼びかけが行なわれました。

（支援室）